

おにがまいせき
鬼釜遺跡 現地説明会の資料

(財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

1 調査の概要

- ・遺跡名：鬼釜遺跡
- ・調査場所：飯田市上久堅1930-11番地ほか
- ・調査原因：国土交通省飯田国道事務所による国道474号飯橋道路建設工事
- ・調査期間：平成23年4月11日～11月30日(予定)
- ・調査面積：16,300㎡

2 鬼釜遺跡の位置と地形

鬼釜遺跡は天竜川の東側、天竜川にかかる水神橋(松尾地籍と下久堅地区を結ぶ橋)から6kmほど東の上久堅地区にあります。標高は約661mです。

鬼釜遺跡は玉川によって形成された扇状地に立地し、遺跡の北側が玉川と接しています。遺跡の範囲は南北約250m、東西約900mと広大で、扇状地のほぼ全域におよびます。



写真1 鬼釜遺跡全景(西から上久堅小学校方向を臨む。平成23年撮影)

3 調査成果

今回の調査で、鬼釜遺跡の地形は、①玉川に沿う自然堤防、②自然堤防背後の低地、③低地背後の流路跡にわかれることがわかりました(図1参照)。

調査を進めた結果、①の自然堤防上では縄文時代・平安時代・中世にはムラが営まれ、古墳時代には墓が築かれていたことがわかりました。

■ 発掘で見つかった主な遺構と遺物

・縄文時代(約4,500年前)

竪穴住居跡は3軒みついています。

写真2は、残りが比較的良好な竪穴住居跡です。この住居跡は調査区外まで延びているため、正確な規模は不明ですが、直径約3mの円形の住居跡であったと考えられます。中央に火を焚いた跡(炉跡)、そのまわりには当時の人が捨てた土器がたづねられた状態で出土



写真2 調査中の縄文時代の竪穴住居跡(SB08)

しました。

②の低地でも自然堤防に近い場所からは、深鉢形土器と打製石斧、磨製石斧、さらに土偶といった縄文時代の遺物がまとまって見つかりました。この遺物は自然堤防の上で生活を営む縄文時代の人々が捨てたものと考えられます。

・古墳時代(約1,400年前)

久堅神社地と接する調査区中央部から古墳が発見されました。久堅神社地には鬼釜古墳の石室の石が祀られており(写真3)、『下伊那史』(昭和30年刊)や『上久堅村誌』(平成4年刊)の記載によると、明治25年頃に発掘がなされ、出土した直刀・馬具・埴瓶は飯田市立上久堅小学校に所蔵されています(写真4)。



写真3 久堅神社地に祀られている鬼釜古墳の石室の石



写真4 鬼釜古墳出土の直刀と馬具(上久堅小学校所蔵。同校より借用し、今回の現地説明会で展示)

鬼釜古墳では古墳の東側半分は道路用地内、西側半分は用地外となります。現在、用地内の調査では古墳をめぐる周溝と部分的に残る墳丘の盛土、石室の石(天井石か?)がみついています。(図2参照)

古鬼釜古墳の規模は直径20m弱(周溝の外側上端で計測)、古墳の形態は円墳、出土土器から古墳の時期は6世紀と推定されます。石室の形態は確認されている天井石の大きさからみて、横穴式石室であったと考えられます。

調査前に鬼釜古墳の場所は小高く盛り上がっていたため、古墳の墳丘が残っている可能性があります。調査により、小高く盛り上がる土のなかからは、近世以降の陶磁器や近世の銭貨(寛永通宝)が出土(以降、近世以降の盛土と呼称)し、本来の古墳の盛土が下にわずかに残る程度でした。

しかしながら、近世以降の盛土からは、勾玉・管玉・鉄鏃、高坏など、古墳時代の遺物も出土し、これらの遺物は、本来古墳の石室に副葬されていたと考えています。

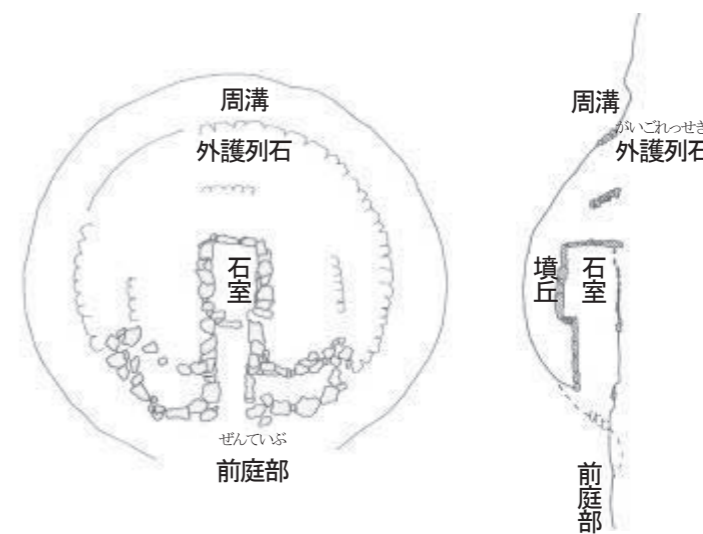


図2 古墳の略図と名称
県埋文センター1997『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22-清水製鉄遺跡・大穴遺跡』掲載図に加筆

鬼釜古墳の調査は、現在、近世以降の盛土を取り除いて、古墳の盛土が露出している状況です。今後は、古墳に伴う遺構・遺物の存否確認とその調査を行う予定です。

・平安時代（約900年前）

竪穴住居跡は9軒みついています。

写真5は、一辺約4mの正方形で南東隅にカマドがある竪穴住居跡です。竪穴住居跡に埋まった土を掘り下げたところ、床の直上に炭化物と焼土、さらに炭化した木材が広がっていました。

炭化した木材は、住居跡の中央部から放射状に認められ、住居の上屋が火災をうけ、焼けたもの住居の床面に崩れたと考えられます。遺物は灰釉陶器の破片が1点出土したに過ぎないため、家財道具は持ち去ったものと推測されます。

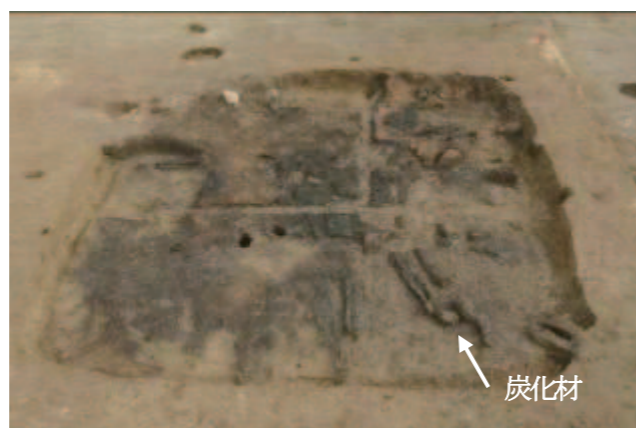


写真5 焼失した平安時代の竪穴住居跡 (S B02)
(すでに調査は終了しました)

・中世（約400年前）

竪穴建物跡は2基みついています。遺物が出土していないため時期は特定できませんが、中世と思われる掘立柱建物跡は6棟みついています。

写真6は、一辺約2.5mの正方形の竪穴建物跡です。建物跡に埋まる土からは、16世紀に瀬戸(現在の愛知県瀬戸地域)で焼かれた天目茶碗やすり鉢の破片が出土しました。

この建物跡には、壁際に約20cm間隔で柱穴がめぐっています。壁と柱穴の間には、幅約5mmの薄い粘土質の土が残り、これは壁と柱との間に設置した壁材の存在を示した痕跡かもしれません。

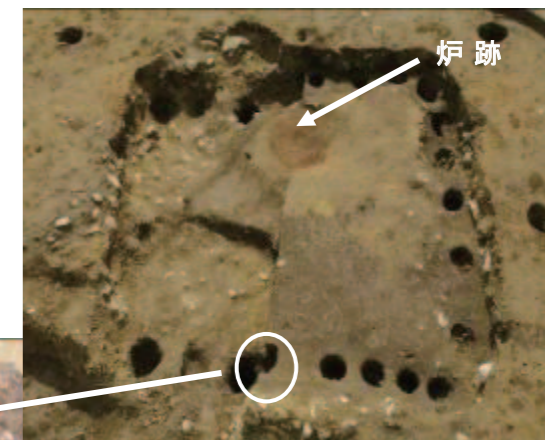


写真6 壁際に柱穴がめぐる中世の竪穴建物跡 (S B04)
(すでに調査は終了しました)

さらに、建物内では炉跡(焼土)がありました。作業場もしくは倉庫的な性格の建物であったと推測しています。

写真7は2間×2間の総柱の掘立柱建物跡で、平安時代の竪穴住居跡(S B02)と重なっています。柱穴から遺物が出土しなかったため建物の時期は特定できませんが、柱穴の形は配置から、中世のものと考えています。この建物跡は、柱穴の配置が総柱であることから、高床であったと考えられます。

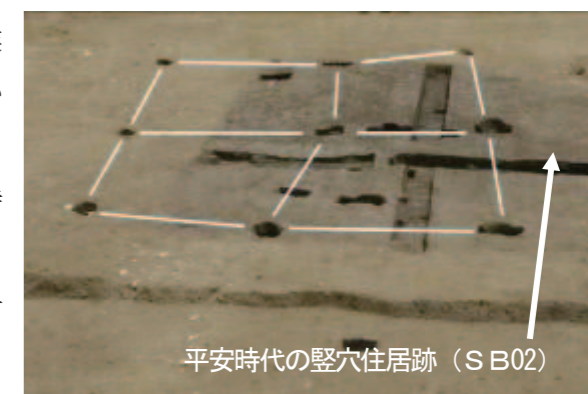
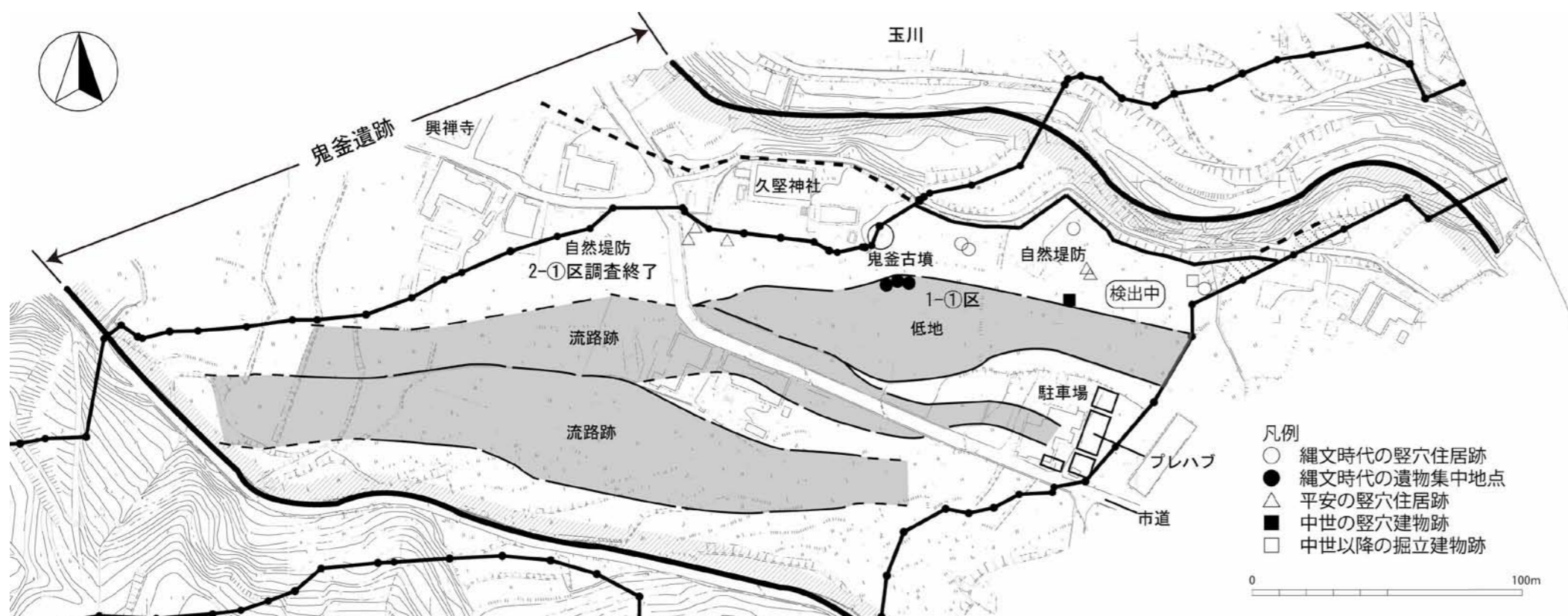


写真7 中世と思われる掘立柱建物跡 (S T02)
(すでに調査は終了しました)



長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4
TEL(026)293-5926 FAX(026)293-8157
E-mail info@naganomaibun.or.jp
インターネット(最新の情報はこちらから)
長野県埋蔵文化財センター 検索
http://www.grn.janis.or.jp/~maibun/

図1 鬼釜遺跡調査図